

水平線【院長コラム 2026 年 9 月】

「わかりません」を言うことで

職業柄若いお医者さんに接することが多く、特に 2004 年からは卒業したての先生が必ず自分の職場へ研修に来るようになった。それぞれ出身大学は違っても卒業したら医者としてのスタートラインは一緒に、新人の先生はおおむね全員向学心に満ちた顔で患者さんや他職種の人たちと向き合う。医療現場では多くの医学知識が必要で、経験を積んだ先生はこれらを組み合わせて（応用して）医療を行う。だから知識だけで応用のしかたを知らない新人の先生が、実際の現場で苦勞するのは不自然なことではない。

そんな時黙っていても教える先輩医師もいれば頼まれないと教えない医師もいる。ただ、新人医師が「わかりません、教えて下さい」と言えば大方の先輩医師は「それはね、・・・」と話し始める。ところが新人医師の中には「念のために聞きますが・・・」などという聞き方をする者がいる。聞く本人はわかりませんを言い換えているだけなのだろう。しかし、自分には知識があることを示すこの聞き方は教える側に警戒心を抱かせてしまい、結果得ることが少ない損な聞き方となる。数々の試験をクリアしてきたその新人医師にとっては、わかりませんは口にしてはいけない言葉と信じているのではないか、と感じる瞬間である。

しかし、わかりませんと言うことで教えられる量に差が出て、医療人としての成長に影響する。これは医療職のみならず、他の職種でも同じだろう。

前回コラムに共通しているように思うが、「わかりません」と言うことはその人が成長するための知恵ではないだろうか。